幼稚園の源流を求める旅

森有礼の第二次在米時代(8)

ニューヘイヴンへ

国吉　栄

ニューヘイヴンの森有礼

全米教育協会大会に参加してからおよそ三か月過ぎた一八七二年十月末、森有礼は津田梅子をランマンに託し、十二歳の山川捨松と永井繁子を伴って、夜行列車でコネティカット州ニューヘイヴン(New Haven)へ向かった。

二〇〇八年の旅の最後に、私もニューヘイヴンに向かった。ニューヨークからなら列車で一時間半ほどの距離である。久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』(1988)は著者の曽祖母にあたる捨松の生涯を描いたもので、捨松が青春時代を過ごしたニューヘイヴンでの新たな資料発掘は森研究にとっても貴重である。ニューヘイヴンでは、私も捨松の受け入れ家庭となったベーコン牧師の資料をまず見せていただこうと思っていた。

ニューヘイヴンの街の中心を占めるのはイェール大学である。そのSterling Memorial Libraryに、ベーコン牧師ほか森に関係する人物たちの資料がある。最初の日に、同図書館のManuscripts and Archivesの部屋の受付で資料

を撮影してもいいかと尋ねると、COPY Manuscript and Archives, Yale University Libraryと印字された紙片を渡された。この部屋の資料はカットごとにクレジットを入れて撮影することになっているのだ。米国の図書館は、日本と違い、閲覧者自身による写真撮影を許可している所が多いので、私のような研究費をもたない者には大変ありがたい。二日目からはすっかり顔を覚えてくれ、部屋に入るとすぐにシールを渡してくれるようになった。手書きの読みにくい文字を教えていただいたりもした。

手書き資料はパーソナルな内容であることが多く、文字そのものにその人が感じられるので、活字の資料を見るのとは異なる感覚がある。日記や手紙など、本当にそんな個人的なものを読んでいいのだろうか、失礼して読ませていただきます、という思いである。

ベーコン牧師は手帳に日録を記していた。一年に一冊、革表紙の小型の手帳である。空白の日も多いが、幸いこのあたりは記入がある。私の目に飛び込んでくるのは、どうしても森の名前である。

1872/10/31 Thursday　The two Japanese girls came today. Mr. Mori the Jap.[86] ambassador dined with us.

捨松と繁子を連れてきた森は、少女たちとベーコン家で食事を共にしたという。彼女たちも心強かったであろう。その翌日の欄に思いがけない記述があった。

Mr. Mori send to a meeting of gentlemen at Sec. Northrop's his propose memorial to Prime Minister of Japan on Religious Liberty.

コネティカット州教育長ノースロップ宅で開かれた会合で、森が一同に*Religious Freedom in Japan*の草稿を見せたというのである。太政大臣三条実美に宛てた信教の自由を求める請願とその憲章草案である。

森は少し前にピーボディーのいとこにも、この草稿を見せていた。国務長官フィッシュにも草稿を渡して意見を求めていた。二〇〇六年、私はたまたま議会図書館で、フィッシュが森に草稿を返却した際に同封した手紙を発見した。「原理的な問題で意見の異なる点はありますが、宗教的寛容、思想・良心の自由という重要な問題についての立場の健全さには、まったく異論はありません。明

確に、力強く、哲学的に論じられていると思います。もしこれが受け入れられるなら、古くしかし進歩的な御国にとってどんなに幸いでありましょう。あなたが御国の憲法にリベラルな思想を刻むために尊い努力をしてきたことは、あなたにとって永遠の名誉となるでしょう」。

森は絶えず目標に向かっていた。

ドゥアイの手紙

この部屋に通って何日目のことだったろう。

Whitney, William Dwight, Family Papersの書簡の箱を机の上に置き、収められている手紙に目を通していた。必要な資料の撮影はもう済ませていたが、まだ時間があった。書簡類はコレクションごとに主だった差出人名が目録化されていて、閲覧室手前の調査室で見ることができる。すでに思いつく名前は目録であたっていたが、特にこれはと思うものはなかったから、その時具体的な何かを探していたわけではない。ただ、何となく未知の資料に出合えたらいいな、というほどの気持ちだった。

一通ずつざっと目を通していると、発信地がNewarkとなっている手紙があった。Newark ?　はっとした。急いで頁をめくって末尾の差出人名を見ると、D. Adolf Douaiとあった。こんなところでDouaiに出会うとは。

アドルフ・ドゥアイは、ニューヨーク州ニューアークのジャーマン・イングリッシュ・アカデミーの校長で、*The kindergarten*の著者である。同書は東京女子師範学校に幼稚園を創設するに際し、わが国で最初に完訳された幼稚園文献で、邦題は『幼稚園記』。訳したのが関信三であった。私は椅子に座り直し、最初からていねいに読み始めた。

一八七三年一月十六日付、イェール大学言語学教授ホイットニー宛書簡である。端正な筆跡に似つかわしくないDear Sir !という書き出しに、何ごとかと思った。「前回のアメリカ言語学会でお会いしたのを覚えておいでしたら、私が教則本付英語読本シリーズの著者であることも思い出していただけるのではないかと思います」。これはホイットニーへの初めての手紙なのだ。ホイット

ニーはアメリカ言語学会の会長であった。

「一月十五日付の*New York Tribune*紙で、日本公使の森有礼氏があなたに宛てた手紙を読みました」。英語を簡略化して日本に取り入れるという考えについて、森がホイットニーに意見を求めた手紙である。

「森氏と私が同じ改革をめざしていることは衝撃です。英語の教授法を簡略化することに、私は人生の二十年を費やしてきました。私は日本国民のために森氏がなそうとしている計画を、比較言語学と合理的教育学の成果に基づいて立案する上でお役に立つと思います」。

「あなたは森氏の目的に関心をおもちのようですので、ご高覧に付し森氏にご推薦いただくために、失礼を省みず私の英語教本をお送りいたします（私の本の出版人であるニューヨークのシュタイガー氏に、用意ができ次第、私の英語の本をすべてあなたにお送りするよう指示しました）。そこに書かれている計画は私が森氏に推薦すべきものとは違いますが、少なくとも幾つかの重要な点で一致しています。できるだけ早く、ご都合の良い時に、短いお返事をいただければ幸いです。

敬具　アドルフ・ドゥアイ」

ドゥアイはホイットニーに森への仲介を必死に頼んでいた。ホイットニーの返事はわからない。しかし返事がいかにあれ、シュタイガーは間違いなく森にドゥアイの本を届けた。なぜなら、これ以降、両者の間に通信が開始されるからである。のみならず、わが国の国会図書館には一八七二年版のドゥアイの英語教本と、同じく同年に出版された*The Kindergarten*第四版が存在している。

森は、彼が大いに関心を抱き、にもかかわらず思うような提案を得られなかった英語問題を通してドゥアイと知り合い、ドゥアイを通して、幼稚園文献の出版人であり、フレーベル考案の遊具「恩物」の製作販売者であるシュタイガーとつながったのである。森有礼とドゥアイとシュタイガーと幼稚園。私は書籍で埋まった古い図書室の椅子の背にもたれ、高い天井を見上げた。日本幼稚園史の大きな謎が解けていくような気がした。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）